

Vol. 58
September
2026

JDS Network News

発行元：一般財団法人日本国際協力センター（JICE）



表紙：東ティモール ラウテン県 コムの海岸

Topics

活躍する帰国留学生（バングラデシュ）

◆ 活躍する帰国留学生（ウズベキスタン）

◆ ほっとひと息：東ティモール



今回は、バングラデシュとウズベキスタンにて活躍する帰国留学生を紹介します。

Mr. Md. Shafiqur Rahman(モハンマッド・ショフィクル・ラハマン氏)

国際大学大学院国際関係学研究科、2012年修了、バングラデシュ人民共和国駐ネパール特命全権大使

バングラデシュJDS帰国留学生であるモハンマッド・ショフィクル・ラハマン氏は、2025年6月にバングラデシュ人民共和国の駐ネパール特命全権大使に任命され、同職にて活躍しています。同氏は2010年に来日し、国際大学国際関係学研究科の修士課程に留学しました。



モハンマッド・ショフィクル・ラハマン氏

ラハマン氏は、JDS留学時には外務省管理部門の課長補佐を務めていました。JDS留学後、在エジプト大使館参事官や外務省西アジア局長等の要職を歴任し、2025年6月には駐ネパール特命全権大使に就任するなど、バングラデシュの外交を担う中核人材として活躍しています。

同氏に、日本を留学先として選んだ理由と、日本で
の留学経験がその後のキャリアや職務遂行にどのよ
うな影響を与えたのかについて伺いました。

私が日本を留学先として選んだ理由の一つは、日本に強い関心を持っていたからです。当時、バングラデシュでは「Look East(東方重視)」の考え方の下、アジア諸国との関係強化やアジアの発展経験から学ぶことが重視されていました。実際に日本へ留学したことで、国際大学の国際的な環境の中で、多様な国々の学生と共に学ぶ貴重な機会を得ることができました。日本は、東アジアの発展モデルを学ぶことのできる国であり、バングラデシュの若者にとって理想的な留学先の一つだと考えています。

日本留学は、私の学術的・専門的能力の向上に大きく寄与しました。国際大学では国際関係と外交を学び、日本がアジア太平洋地域の中で国際情勢をどのように捉え、外交政策を展開しているのかを研究しました。その過程で、自身の視野を大きく広げることができ、多様な観点から国際問題を分析する力を養うことができました。こうした経験は、外交官としての職務遂行のみならず、その後のキャリア形成にも大きく貢献しています。

ラハマン氏が今後も外交分野において一層活躍されることが期待されます。



Mr. MUSTAFAEV Khurshed Bakhtiyarovich (ムスタファエフ・フルシェッド・バフティヤロヴィッチ氏)

立命館大学大学院経済学研究科、2014年修了、経済財務省副大臣

ムスタファエフ・フルシェッド・バフティヤロヴィッチ氏は、2024年5月より経済財務省副大臣として活躍しています。

ムスタファエフ氏は、2012年にJDS留学生として来日し、立命館大学大学院経済学研究科で学んだ後、2014年に修士課程を修了しました。留学時には財務省に勤務しており、帰国後はブハラ州コゴン地区財務部副部長を務めた後、財務省本省においてエネルギー、鉱業、産業政策、国営企業改革など幅広い分野に従事しました。2018年以降は財務省内の主要部署で局長・部長職を歴任し、2024年5月に経済財務省副大臣に就任しました。



ムスタファエフ・フルシェッド・バフティヤロヴィッチ氏

現在は、国家予算管理から産業政策まで幅広い分野を所管しています。これまでには、中長期的な経済・金融改革戦略の策定、国際信用格付けの取得、国営企業改革や民営化の推進、産業振興等に携わり、国営企業や国立銀行の改革に関する数々なプロジェクトを成功に導いてきました。

JDS留学について、ムスタファエフ氏にインタビューしたところ、「日本で得たさまざまな知識と経験は、現在の業務遂行や経済課題の解決において重要な役割を果たしています。また、日本の経済政策、コーポレート・ガバナンス、技術革新は、ウズベキスタンにおける経済改革のモデルとなっています」と振り返りました。

さらに同氏は、「JDS留学を通じて、専門知識だけでなく、英語力、分析力、実践力、コミュニケーション能力、リーダーシップを身につけることができました。特に、日本での留学生活を通じて培ったリーダーシップやコミュニケーション能力は、その後の昇進やキャリア形成に大きく貢献しています」と述べています。

ムスタファエフ氏は、日本とウズベキスタンの関係強化が同国の発展をさらに後押しすると期待しています。現在も日本企業が参画する官民連携事業や電力インフラ開発に携わり、日本で得た知見を経済発展に活かしています。

今後も、ムスタファエフ氏のさらなる活躍と、日本・ウズベキスタン両国の関係強化への更なる貢献が期待されます。



東ティモールは、東南アジアのティモール島東部に位置する国です。2002年に独立を果たし、美しい海と豊かな自然、多様な民族文化に彩られた独自の魅力を有しています。ポルトガルやインドネシアとの歴史的なつながりを背景に、伝統文化と外来文化が融合した暮らしが育まれてきました。今回は、そんな東ティモールの地元の市場で見られる個性豊かな特産品をご紹介します。

① Eucheuma (和名:キリンサイ)

現地の市場では、日本ではあまり見かけない種類の海藻が販売されています。沿岸部で採れるこの海藻は、家庭の食卓で親しまれている食材の一つで、「ブドウ・タシ(Budu Tasi)」と呼ばれ、伝統料理でもあるサラダに使われています。ブドウ・タシサラダは、海藻に玉ねぎやトマト、唐辛子などを加えて和えたシンプルな料理で、お祝いの席や地域の行事でも楽しまれています。実際に市場で売られている海藻を見てみると、その独特の見た目が印象的で、日本の海藻とは異なるコリコリとした食感も魅力の一つです。



② Fehuk Midar (フェフク・ミダル)

市場では、紫色やオレンジ色、クリーム色など、さまざまな色のサツマイモが並んでいます。フェフク・ミダルと呼ばれるサツマイモは、栄養価が高く育てやすいため、東ティモールの人々の暮らしを支える重要な食材の一つです。朝食や「メレンダ(間食)」として親しまれており、特に農村部では伝統的な食生活を支える欠かせない存在となっています。カラフルなサツマイモは、茹でるだけで自然な甘さを楽しめます。素朴ながらもどこか懐かしさを感じる味わいで、東ティモールの人々に長く愛されている理由が分かります。

JDS 3つの特徴

1

行政官限定事業

※一部例外がございます

2

7,029名 28カ国の実績

※事業終了国の人数も含む ※2026年度までの人数

3

大臣・局長級を輩出

対象国の社会・経済開発計画の立案・実施に関わる若手行政官が日本で修士号または博士号を取得しています

出身省庁…財務・経済、法務、行政、環境、インフラ、教育等

<JDS実施国 (JICE)> ※受入開始年順

ウズベキスタン、ラオス、カンボジア、ベトナム、モンゴル、
バングラデシュ、フィリピン、キルギス、タジキスタン、
スリランカ、東ティモール、パキスタン、ブータン、モルディブ、
ケニア、セネガル、ウクライナ、モザンビーク

※中国は2012年、インドネシアは2006年に事業終了しました。

日本で専門知識を身に付け帰国した留学生は、
日本との政策対話に携わり二国間関係の強化に寄与する等、
様々な場面で活躍しています。

人材育成奨学計画 (JDS) は無償資金協力による
JICA留学生事業です。

編集後記

JDS Network News (JNN) をお読みいただき、ありがとうございます。

今年も8月から9月にかけて、新たなJDS留学生が来日しました。300名を超える留学生が20か国以上から来日するため、国内と現地の担当者と緊密に連携しながら、4月頃から周回の準備を重ねてきました。

一方で、日本では毎年8月から9月にかけて台風や大雨が発生しやすい時期でもあります。今年も悪天候に見舞われる中、各種イベントは予定どおり実施されています。留学生たちのこれから始まる留学生活への期待に満ちた輝く笑顔を見ると、準備の苦労も忘れ、この事業に携わる大きなやりがいを感じています。

JDS事業に関するご質問がございましたら、お気軽にメールで弊センターまでお問合せください。また、本誌へのご意見・ご感想もお待ちしております。

【お問い合わせ先】

一般財団法人日本国際協力センター (JICE)
留学生事業部広報担当
E-MAIL: jds.pr@jice.org